

での地形図を5枚収め、第9の町内図の章では4種類を集めている。つぎに珍しいのは、第10章に東京市四谷区の地籍図を集成していることである。このように対象区全域の地籍図を収載するのは余り例のないことであり、研究者には極めて有意義で、本書の意義は大きい。同じく第11章には東京府豊多摩郡内藤新宿町の地籍図を載せている。最近の地図を集成した12章では5葉の街図を掲げており、住居表示新旧対照案内図や史跡地図などは一般に便利である。なお、つぎに解説編を設けて、本書掲載の各絵図や地図の説明と注釈を加え、さらに四谷地図の理解を深めるために「四谷の町とくらし」と銘を打って、徹地誌的に四谷の生活の移り変わりを展望している。

要するに上記3冊の地図集はいずれも東京という大都市地域の変貌を把握するには不可欠の地図史料集であり、また小中高校の教材資料の史料としてもその利用度は高い。(山田安彦)

京都大学文学部地理学教室編：地理の思想 地人書房、1983年、A5判、320頁

本書は、I序論、II地理思想の萌芽、III中国の地理思想、IV日本の伝統的な地理思想、Vヨーロッパの出会いという5つの章と巻末の東西地理学の交流を中心にまとめられた地理学年表からなり、全体で25の論文をその中に含んでいる。一篇の論文は、紙幅に制限され短いものであるが、しかしいずれもそれぞれの専門分野において長い研究業績をもつ執筆者が、欧米地理学史の文脈でとらえられてこなかった「地理の思想」の解明（I～IV章）と非欧米社会である日本を事例とした欧米の近代地理学の受容について問題提起的にとりくんだものであり、多くの示唆に富んでいる。個々の論文にわたって詳しい書評を試みることは、もとより評者の力をはるかにこえている。ここでは、本書全体の意図するところに焦点をあてて、考えるところを若干まとめた。

「はしがき」に記されているように、本書の成立は——とくにI～IV章までに関して——、1980年京都で開催された国際地理学会地理思想史部会における「地理的ラングージ」のテーマに基づいた本書執筆者による報告に負うところが大きく、その延長線上にある。同部会に参加した京都大学文学部地理学教室の関係者によって、同教室の研究成果の一貫として刊行されたものである。この地理思想史部会のテーマの主旨である地理的ラングージと地理と

の対応という観点から本書を考察することは、本書を理解するのに役だが、しかし、本書のめざすところは、単に、さまざまな「場所」あるいは「文化圏」においてこの対応を検討し、その多様な内容を明らかにするのにとどまるものではない。このような問題領域に対する関心は、すでに山野正彦「空間構造の人文主義的解説法」(人文地理31巻1号、1979年)、竹内啓一「主観の地理学からの逆照射」(一橋論叢、81巻6号、1979年)、千田稔監訳『地図のあなたに』(地人書房、1982年)において展開されているように、現象学的観点を地理学に適用した人間主義的 humanistic 地理学の業績によって大きな影響を受けてはいるが、本書は、人間主義的地理学の枠にとどまるのではなく、「世界観」、「文化圏」と「地理の思想」との対応を具体的に検証し、地理学説史の進展に貢献しようとするものである。本書の意義は、I章序論の水津一朗「日本における地理の思想」において「現代地理学に必要な発想の転換をはかり、現代にふさわしい地理学の本質を確立するためには、ひとたび欧米地理学の羈絆をはなれて、わが国で培われた『地理の思想』をあらためて吟味する余地はないのであろうか」(pp. 4~5)という指摘に代表される。さまざまな「場」あるいは「文化圏」とは、アメリカ大陸やシベリアの未開民族、中国、日本であり、これらの地域における「地理の思想」の検討である。しかし、「地理」あるいは「地理の思想」といわれるものが何を意味するかは明確にされてはいない。「グローバルな『地理の文法』を準備するための方法論は、もちろんまだ手元にない」p. VIII)というように、むしろ「地理」、「地理の思想」という概念に対するはっきりとした共通の内容規定をこの段階でなすことをさげたとみるべきであろう。各々の論文で重複しているとはいえ、分析の対象としてとらえられている「地理」の内容は、空間認識、空間組織、自然とのかかわり、地誌といった地理学上のテーマにかかわり、空間の分割方位、中心、周辺、領域、場などの地理的空間を形成する基本的要素を通じて分析したものとみることができる。久武哲也「岩絵と砂絵の地図学」、小林致広「古代メソアメリカの絵地図」、斎藤辰二「原初的自然観と地理的認識の間」の論文は、空間に関する現実の情報を表現した水平的世界が、神話世界という垂直の世界に媒介されて認識されるのを地図という表現手段を通じて検討し、未開社会にお

ける空間認識の体系を明らかにしている。「地理の思想」は世界観あるいは世界像と結びついており、「地理の思想」だけが他の文化体系あるいは思想と切りはなされて理解されえないことをよく示す事例である。しかし小林論文において世界像のような理念を表現するマバムンディと生活世界の具体的な図像表現としての地図の区別の指摘や、斎藤論文においてシャーマンの太鼓を単に宇宙の表現として見る解釈は一面的であり、シベリア原住民の氏族社会内部に関連する分野と経済的活動に関連して自然への対応に関する分野の区別の指摘が示すように、未開社会の事例においてさえも、水平的世界と垂直的世界との相互交換の構図は単純ではない。久武論文が、相互交換の場として、地図的表現の意味を考察し、「メタ地図の構図」という概念を提示したのはこの点にかかわる問題である。さらに千田絵「歴史地理学における『復原』から『意味論』へ」では、より明確に、景観の復原＝地図化はメタランゲージュであり、意味論的解釈に進むことの意義が展開されている。それぞれの「場」における地理的空間の意味論的解釈の検証の多様性が、本書の内容の多様性を物語っている。評者に関心をもつのは、多様性の確認にとどまらず、例えば、高橋正「空間の区分と方位について」や船越昭生「中国伝統地図にあらわれた東西の接触」などにみられるように、ひとつの文化圏や国家というような地理的空間レベルでの方位概念と世界表象との対応とそこから導き出される「地理の思想」が、他方で、武藤論文にみられるような地理的空間のレベルあるいは戸祭由美夫「言葉よりみた古代日本の生活空間認識」で展開されるような地理的空間レベルで導き出される「地理の思想」とどのような関連があるのかないのかという点にかかわっている。海野一隆「漢民族の地理思想」では、この点に関連して「地理」という言葉の検討を通じて、客観的記述を旨とする地誌とト占的な内容との風水書とが併存し両義性をもっていること、さらに官の側と民の側とは意味が異なっていたとすべきであることが指摘されており、また戸祭論文も日本の古代におけるムラ、サトという概念が、官の側による政治空間の再編に関連して分析されており、この問題を考える手がかりを与えてくれる。一方でそれぞれの社会集団がなる「地理の思想」と他方で地理的空間知覚の階層性と「地理の思想」の関連についての問題は、関心のもたれるテーマであり、それ

ぞれの文化圏、国、場において今後具体的に検討されるべきテーマでもある。そしてそれはまた、秋山元秀「中国の目録における地理書」や木村宏「16世紀以前、中国人の南海地域に関する地理的知識」に代表されるように、歴史的段階に対応して検討されるべきことはいうまでもない。

矢守一彦「鳥瞰図考」では、大和絵の俯瞰図の伝統と日本における地図づくりを検討し、日本的な特徴を指摘した。他方、地理的空間組織を規定する準拠枠となるのは、土着の地理思想に限られない。本書の日本の事例にみられるように、異文化の空間組織の原理が歴史的に導入される場合もある。水津論文や高橋誠一「古代の都市と城壁」の論文は、このような問題にとり組んだものであり、日本の土着の地理思想と外来文化の空間組織の原理の連節が分析され注目される。

V章のヨーロッパとの出会いは、日本における近代地理学の形成期に、ひとつには、近代地理学が高等教育においていかに確立されていったかという制度的な研究であり、他方で、それにかかわった具体的な個性をもった先達の研究者および研究者群との対応の分析を示している。ひとりの地理学者の地理思想の形成プロセスに焦点をあてた困難な研究にとり組まれている。今後さらに研究が蓄積されることが期待される領域である。

残念なのは、IV章で展開されたような日本の伝統的な「地理の思想」が、近代地理学の確立においてどのような関連をもったのかの分析がなく、双方の間の連節がいかになされたのかあるいは全く切り離されたものとしてすなわち断絶として考察されるのか興味ある。「地理の思想」から「地理学の思想」への展開の問題でもある。本書では非西欧社会が事例としてとりあげられているが、同様の問題は、西欧社会においても、例えばドイツの伝統的な「地理の思想」と近代地理学の思想史との関係にもみられるであろう。また、V章では、とくに地理学と関連の深い個別科学が、日本においてどのように近代科学として確立したかを比較検討することが、思想史とのかかわりで地理学史をみる場合に重要となろう。

前述のような観点からとりあげられる地理の思想史の研究が、日本においてのみならず少ない現在、豊かな内容と多くの示唆に富む本書は同様のテーマに関心をもつ多くの人にとって得るところが大きいものと思われる。(栗原尚子)